

保育園における異文化接触の現状と 異文化間教育ショート・プログラムの試み

田 中 共 子

要 旨

近年自治体の公立保育園において、外国人の保護者をもつ児童が増加している。今回はさる市の保育園保母を対象として、異文化間教育のショート・プログラムを試行したので、その概略について述べる。あわせて園における異文化接触の現状を調査したので、その結果についても報告する。また参加者は、課題としてアシミレーター形式の学習例題を作成した。続く同種の試みの参考とするため、その内容をまとめて紹介する。最後にプログラムへの反応、今後の展開の可能性について述べる。

I. 序

近年の日本では、外国人労働者、外国人留学生、配偶定住者（外国人花嫁）などの、現在あるいはもと外国籍である人といった「外国人」が増加している。地方自治体はこうした親を持つ児童・生徒の増加に対し、学校や保育園といった場における教育・福祉面での対応を迫られている状況にある。その中で、自治体の関係者や、保育園・学校の指導者に対する異文化間教育のニーズも高まりをみせている。

今回はさる地方都市の市立保育園の保母を対象として、異文化間教育のショート・プログラムを試みた。プログラムは1993年度に合計3回、それぞれ独立に行われた。まず園長の立場にある者14名が、分科会形式で学習グループを組織しており、第1回目のプログラムはその勉強会という形で行われた。この会は、「保育相談」という形で保護者の相談にのる方法を学ぶことを目的としており、その研修テーマを「異文化間カウンセリング入門」とした。第2回目としては、副園長に該当する立場の者80名を対象とした市主催の研修会が行われた。テーマは、「異文化間コミュニケーション」とした。3回目も同テーマの研修会で、園長の立場の者80名が対象であった。

内容はいずれも、講義、体験の発表とディスカッション、シミュレーション、文化アシミレーターによる学習、およびアシミレーター形式の学習素材をグループ単位で作成することを中心とした。第2回目には、研修に先立って参加者から、現在の園で外国籍の児童や「外国人」保護者を持つ児童（以下外国人児童）の保育に関して、いかなる問題がある

のか、それに対してどのような対策や意見があるのかについて、調査を行った。研修中の講義で結果を紹介し、現状認識と共通理解を深めるために活用した。

以下にまず調査結果を述べ、次にプログラムの概略を説明し、そして作成された学習例題を紹介する。最後に研修への反応と、今後の展開について述べる。

II. 「外国人児童の保育に関する現状と対応」についての調査結果

【目的】

西日本のさる中都市において、市立保育園の保育者側からみた、外国人児童の保育の現状と問題点を具体的に調べる。またそれに対しどう対処しているか、外国人児童の指導にどのような抱負や意見を持つかを含めて、保育者側の関わり方の視点を整理する。

【方法】

1. 手続き

異文化間教育のショート・プログラムのための研修が計画された際、それに先立って、研修の企画者・責任者を通じて、参加予定者80名に調査用紙を配布した。郵送またはファクシミリによって回答を回収した。有効回答は77人（回収率96.3%）であった。

2. 質問紙

研修内容を焦点化するために、実態と意見を把握することが目的であると説明し、以下を尋ねた。まず全員に、1. 年齢、2. 園の規模、3. 園にいる外国籍園児の数、4. 園児と保護者の日本語力、5. 海外渡航経験、6. 外国人の友人の有無、7. 学んだことのある外国語を選択式の設問で尋ねた。

さらに自由記述の設問を用意した。そのうち外国人のイメージについての設問には2つ目的がある。1つは回答者の外国人に対する視点を客観化する素材として活用することである。もう1つは、同じ質問を、研修後の感想記述用紙においても行い、結果を比較して研修の影響を確認することである。

8. 園以外に、特に外国や外国人との接点がありますか（はい、いいえ）。それはどのようにですか。

9. 外国人というと、どのようなイメージを持っていますか。3つあげてください。

10. 外国人児童のいる園で、どのような指導をしていきたいですか。

なお、外国人児童の指導経験のある保育者には、以下のことを自由記述で尋ねた。

11. 先生が外国人の児童を指導するときやその親ごさんに接するとき、やりくりにいこと

や困ったことはありましたか。典型的なトラブルを、具体的にあげてください。またそのときの感想もお聞かせください。

12. 日本人児童は、外国人児童をどのように受けとめていますか。よい影響は何かありましたか。困った影響は何かありましたか。

13. 外国人児童の指導や親ごさんとの接触で、先生が工夫しておられること、心がけておられることは、どういうことでしょうか。「こうしたらうまくいった」とうことがある場合は、それを具体的に教えてください。

14. 外国人児童を指導して、自分は変わったと思いますか。変わったとしたら、どこが変わったと思いますか。

【結果】

おもな結果については、表1～表4を参照。外国人児童の保育の経験のある者は、8割近くにのぼった。園児の国籍は、東アジアの漢字圏が最も多く、東南アジア、中南米がそれに次ぐ。本人の海外渡航経験や外国人の友人、英語以外の外国語にふれる機会などは少ないが、園以外に地域社会や親戚関係で外国との接点を持つ者もいる。園の外国人園児の日本語は日常会話程度以上はこなせることが多いが、保護者は全く日本語を使用できない場合が多い。

回答者が抱く外国人のイメージをみると、目につき易い外見的特徴のほか、内面・行動面の特徴、社会・文化的差異、社会での位置づけが認識されている。他に自分自身の気持ちや相互理解の難しさ、人間としての等質さなどをあげている。

指導の方針を尋ねた場合は、特別の配慮が必要なことと同時に、同等に扱うことの必要もあげられた。押しつけずに相手文化と自文化を理解しあうという、文化相対主義的な着眼、日本人側への教育が必要であるという認識、人権など人類に普遍的な価値の尊重にも言及があった。具体的な配慮として、例えば「おかずの中に食べられないものが入っているときは、その子の分はあらかじめはしでつまんでとっておいてあげる」などが述べられた。

外国人児童の指導経験者62人の中で、指導経験についての自由記述項目に回答した者は36人であった。トラブルで目だつのは、情報伝達の困難であった。さまざまな意志疎通の手段を案出しており、確認を取りながら、時間をかけて意志を伝えあっている。ただし微妙なことになると、意志の疎通も困難さを増す。情報伝達の具体的なトラブルの例としては、「遠足の通知がうまく伝わらず、当日駅前集合ができずに、当人だけが登園してしまっていた」などと述べられている。「してほしいこと、してほしくないことで、重要なものがあることに気づいてからは、それに注意するようにしている」という意見もあった。また、時間感覚の違いは、しばしば集団行動をとる際の障害となっている。

日本人児童の受けとめ方をみると、年少ということもあってか、特に意識していないことが多い。むしろ吸収が早く、すぐにまねたり、遊んだりしたがるという。違和感がケン

表1 回答者本人と園の現状について

設問番号／集計結果	
1. 外国人児童保育の経験	あり 62人 全くなし 14人 不明 3人
2. 現在在籍している園児の国籍	中国 57人 韓国・北朝鮮 48人 ブラジル 19人 インドネシア 9人 フィリピン 9人 スペイン 8人 ペルー 4人 イラン 2人 オーストラリア 2人 イタリア 2人 イラク 1人 チリ 1人 台湾 1人
3. 海外渡航経験	あり 19人 なし 57人 不明 3人
4. 外国人の親しい友人	いる・いた 4人 いない 73人 不明 2人
5. 英語以外の外国語を学んだ経験	ある 10人 ない 67人 不明 2人
6. 園以外に外国人との接点	「ある」と回答した者 10人 接点の内容：近所、教会、ボランティア活動、親戚、 家族メンバーの友人、友人の友人
7. 外国人園児の日本語力	十分通じる 14人 日常会話程度 10人 全く通じない 3人 他 6人
8. 外国人園児の保護者の日本語力	十分通じる 5人 日常会話程度 7人 全く通じない 5人 日常会話程度と全く通じない者が半々 5人 他 14人

表2 研修前の外国人のイメージ

数字は回答数（1人平均2.65個）。かっこ内は回答者数80で割って100をかけた数字。

1. 外見的特徴 11(13.8)
肌の色 3 毛の色 1 体格 6 綺麗 1
2. 内面的・行動的特徴 48(60.0)
主張の明確さ 9 積極性 6 開放性 5 おおらかさ 6 明るさ・陽気さ 4
人なつこさ・友好的 2 好奇心 1 勉強家 1 よく働く 1 たくましい 1
2-3年で帰国 1 しっかりしている 1 合理的 2 飾らない 1
しつちに厳しい 1 ユーモア 2 孤立 1 誇り高い 1 感情の起伏 1 柔軟 1
3. 社会・文化的な差 55(68.8)
異文化 19 考え方・価値観の差 3 生活習慣の差 25 食習慣の差 3
人種の差 1 貧しさ・貧富の差 4
4. 社会での位置づけ 11(13.8)
国際交流・国際化・世界への窓 5 留学生 2 アメリカ人 2 出稼ぎ 2
5. 自分の気持ち 30(37.5)
恐れ 4 興味 5 近づきたい・友達になりたい 4 近寄りがない 9
遠くの人 1 近くの人 1 緊張・不安 4 接点なし 1 素敵 1
6. 相互理解の困難 48(60.0)
言葉の違い・ハンディ 42 母国語・英語を話す 2
理解しにくい・問題を生じ易い 4
7. 人間として等質 7(8.8)
違わない 1 同じ人間 5 違和感なし 1

かに発展することもあるが、逆に外国人だからと親切にしたがる場合も多い。

保育者が外国人児童に接するときの工夫としてあげられるのは、まず日本語・母国語を駆使しての言葉かけである。保護者とも、外国語辞書や翻訳者の力を借りるなどして工夫しながら、手間と時間をかけ、焦らず根気よく、十分に話しながら物事を解決するように

表3 外国人児童のいる園での指導の方針・抱負

- ・配慮：具体的で決め細やかな対応、よく話し合う、察してあげる、あせらない、安心感を与える、偏見なく接するなど
- ・同じに扱う：外国人と意識しない
- ・相手文化の尊重：食習慣や言葉の尊重、日本のやり方を押しつけないなど
- ・日本文化の理解：遊び方の紹介、日本を理解してもらいたいなど
- ・日本人側への教育：日本人児童に世界を理解させる、相手文化を教えてもらうなど
- ・心がけ：人権尊重、違いを受け入れるなど

心がけている。そして信頼関係を築くことを大切にし、そのうえで、文化の理解と尊重を実践する。「そごがあったときには、やり方の違いからくるものではないかと、ちょっと立ち止まって考える」という習慣もついている。

保護者は、外国人児童の保育を通じて、自分自身も変わったと述べている。異文化接触への心構えができて、その技術も身につく、視野が広がり、人の差異に寛容になっていくという。また保育の本質を問いなおすことになって、保育者としての自分の成長に資するところがあったとも述べている。

【まとめ】

この市の市立保育園では、すでに外国人児童の指導経験者が大半を占める。経験者の自由記述からは、かなり異文化接触について学習が進んでいることが読み取れる。しかしこの自由記述に回答した者は経験者の6割弱であり、一部の者の認識に過ぎない。ただし学習の一つの到達点を示すという意味で、興味深い内容といえよう。

保育という具体的な仕事を通じての異文化接触であるため、学習が効率的に進む可能性がある。日々の具体的な課題に、速やかに効果的に対処する必要性を強く感じ、それが解決の意欲を支え、さまざまな工夫をもたらしているのであろう。仕事への熱心さは、手間暇を惜しまない献身的な姿勢という形で現れている。どの子にも十分な保育をというプロ意識から、相当の努力が払われているものと思われる。

外国人児童であっても保育の対象であるという認識から、この子らにも十分な保育をするためにはどうしたらいいのかを考えるようになり、それが職務の本質を追求することにつながっていくように思われる。異質なものとのかきあひ方を学習しながら、同時に普遍的な要素や価値にも思い至っていることが読みとれる。

表4 外国人児童の保育経験者による自由記述

指導経験者62人のうち、回答した者 36人

設問番号／記述内容	
<p>11. 外国人児童、保護者とのトラブル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お知らせ・伝達事項が伝わりにくい 行事、持参するものなど 工夫：ふりがな、英語、口頭、通訳 (的な人)、筆談、絵、日本語 のできる方の親に話す、ゼス チャー、会話集の活用 ・説明が困難 ケガの状況、病気の対処、貸し借りな ど ・様子を伝えるににくい 園での生活ぶり、家での様子など ・特にしてほしいこと・ほしくないことが ある 呼び方、仕草、謝りなど ・時間感覚が違う 時間を守ってもらいににくいなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・十分に話す 時間をかける、かなをふる、頻繁に話 しかける、具体的に話す、確認をとる、 わかるまでよく説明するなど ・外国語の使用 訳してもらうなど ・信頼関係 誠意、差別しない、親しみ、歩み寄り など ・文化の理解と尊重 文化・習慣の背景知識、食べ物の配慮、 言語を習う、自文化に誇りをもたせる、 歌を教えてもらう、習慣の違いではな いかと考えてみるなど ・急がない 周囲にも理解を求める、長い目でみる、 よく見守るなど
<p>12. 日本人児童による外国人児童の受けとめ 方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然 特に意識しないなど ・異文化慣れ 単語を習う、親とも話す、 外見やファッションを気にしないなど ・親切・関心 めんどろを見る、遊びたがるなど ・まね 食べ方など ・違和感・いらだち いやがる、ケンカ、悪い言葉など 	<p>14. 外国人児童を指導して自分が変わったと 思う点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化差に起因する問題の理解 意志が伝わりにくいなど ・異文化への関心 外国語学習、ニュースなど ・価値観の多様化 価値観の押しつけがなくなったなど ・相互理解 心をこめれば通じる、偏見がなくなっ たなど ・自文化の見直し 日本文化との対比など ・自然体 案ずるより産むがやすしなど ・保育の本質 保育の基本は同じ、他の保護者にも配 慮や説明など
<p>13. 外国人児童の指導や保護者との接触での 心がけ、うまくいった工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉かけ あいさつ、笑顔、母国語のあいさつ言 葉など 	

Ⅲ. ショート・セッションの概略

異文化間教育のショートプログラムとして、今回の研修で取り入れたのは、基本的には次の要素である。

1. シミュレーション

よく知られたシミュレーションゲームである、「バーンガ」を実施した。

2. ディスカッション

ゲームの体験を言語化し、日常体験で該当する構図を探して討論した。

3. 質問紙調査の結果の紹介、参加者の異文化接触の体験談にもとづく集団討議、講師のコメント

個々の参加者による、日常生活や保育体験の中で出会った異文化接触のエピソードと感想の紹介を行った。質問に対する異文化間心理学的な解釈、例えば異文化適応の段階などを講師から述べた。

4. 市販アシミレーター教材による学習

中国帰国者を対象とした「入郷随俗」(全国社会福祉協議会)、留学生関係者を対象とした「留学生とのコミュニケーションハンドブック」(アルク)から数題を取りあげた。

5. アシミレーター形式の多肢選択式例題の作成と発表

アシミレーターを参考に、学習例題をグループ単位で自作することを課題とした。完全なアシミレーターは文化的背景の知識などを要し難しいため、より自由な形で作成してもらった。すなわち参加者の自由な解釈とニーズをもとに、多肢選択を基本とした学習素材であればよいとした。素材のエピソードは、体験事例をもとにしてもらった。

6. 研修参加の感想記述

体験学習を取り入れた研修への感想と、今回の知見の今後への生かし方を尋ねた。

【作成された学習例題】

第2回目、第3回目のプログラムにおいて、アシミレーターによる学習後、その形式を踏襲して各自の体験に基づいた例題を作るという課題を与えた。学習例題作成のための用紙は、表5に示した。これは続く同種の学習ニーズに応えるものとして利用できるうえ、資料的価値があると思われるため、以下に全作品を紹介する。内容や形式を整えるために、筆者が加筆・修正を加えた部分もあるが、基本的にはもとの形を生かしてある。それぞれの作品には、筆者のコメントをつけた。

例題の内容は、アシミレーターのような一般化しうる典型例というよりは、個々の参加者が出会った生のケースが、例題の形にまとめられたものである。この点ではそれぞれの例について一般化が可能かどうかは、別途検討を要する。従って、「この場合はこうだった」という体験談として、事例的にディスカッション素材として活用することが適切であ

表5 例題作成用の用紙

カルチャー・アシミレーターを作ってみましょう

題：

状況：

考えられる解釈：

- 1 _____
- 2 _____
- 3 _____
- 4 _____

正解：

解説：

ろう。

選択肢の内容も、取るべき態度を選択させるもの、誤解の解明で適切なものを選ばせるものなどが混在している。アシミレーターで言う「正解」の部分は、大抵の作品で実際のところはどうだったのかという帰結になっており、「この場合の理由」を示したり、「勧めたい方法」を示唆したりしている。解説内容も、事態の成りゆきの説明から、取るべき行動のアドバイス、反省点までを含めて、自由に書かれているのが特色である。

主題を見ると、例えば物をあげたりもらったりというケースへの注目が多く、トラブルになりやすい場面だったことがうかがえる。また情報の伝達にまつわる問題も、さまざまなバリエーションで登場している。それが認知的な問題、例えば原因帰属、差別意識、保母への信頼感などに結びつき易いことも見て取れる。こうした問題の展開の仕方には、注意を要すると思われる。こじれた場合は、問題の原因を考え、事態をときほぐし、地道な活動によって理解を進めあうことが勧められている。こうして問題の中から、経験的に勧めたい対処方法が具体的に示されているのである。以下に示す作品は、必ずしも整ったものばかりではないが、問題の姿を理解し、かつ具体的な解決の糸口を知るための資料として、興味深い有用性を持っている。

次の1から9までは2回目、10以降は3回目の研修で作成されたものである。

1. 題「神様ってなんでしょう」

状況：園では7月7日に七夕の行事をする。スペイン人の保護者（職業は宣教師）に対して、クラス担任より「天の神様をお願いするから」と言って、子どもに対する親の願いと、子ども自身の願いを書くように、2枚の短冊を渡した。すると、「私たちの神様は一人だから」と言って、断ってきた。どうして参加してくれないのか。

考えられる解釈：①これが日本人の伝統行事であることも、その楽しさや意義なども理解していない人だったので、変な申し入れだと思って断った。②日頃から保護者と保母の信頼関係が十分でなかったので、面倒なことを頼まれたと思って冷淡に対応した。③日本文化に抵抗を感じており、子どもが日本にあまり影響されないようにと、伝統行事には参加しないことにしている。④保母の方が、相手の生活の中心部分であるキリスト教をよく理解しないで、安易な言い方で依頼した。

この場合の理由：4

解説：この保護者は七夕行事が何かを知らなかった。そのうえ担任は、日本人と同じような感覚で、安易に短冊を手渡してしまった。キリスト教の神についての考え方が生活の中心部分を占めている人だったので、保母の申し入れに混乱してしまい、行事としての意味などは考え至らず、拒絶してしまった。

コメント…文化によっては、神様という言葉や、日本のように曖昧でなく、かなり明確な意味で使う。同じ言葉でも意味や重みが違う。神様という言葉を使うには、事前の説明

がいることを学習したケース。

2. 題「なぜ使ってくれないの」

状況：保育園に2児を預けているパキスタンの留学生一家は、市営の高層アパートに住んでいる。近所のおばあさんが、不要のタンスを使って欲しいと申し出た。しかし母親は、「私は要らない」と言って、どうしても受けとらなかった。おばあさんは「親切に言ったのに」と悲しそうにつぶやいた。どうしてももらってくれないのか。

考えられる解釈：①家具は足りていて、本当に要らなかったもので、邪魔だと思って断った。②母親は、そのおばあさんをもともと信用できないと思っており、あまりつきあいたくなかった。③母親は、不要になったものを人からもらうなどしないという国の風習下で生きてきたので、日本でもその態度を通していった。

この場合の理由：3

解説：この母親は民族意識が強く、自分の国の風習は必ず守る人だった。この人の国では、人からものをもらうのは施しを受けることであるという。もらうと上下の関係ができ、そうした上下関係には厳しいものがあるそうだ。ましてこの母親は、国では上流階級の人で、施す側の人だった。暮らし方にしても必要以上のぜいたくはしない人で、もっとタンスが欲しいとは思っていなかった。園からもらったお菓子も、2人分もらえるのに1人分しかもらわなかったりする。もらっても、まず身内へ、次は親戚へ、そして近所の人へと配る。そういった生活ぶりに、日頃から注意しておくべきであった。

コメント…この国の人に一般化できるかどうかは別だが、もらいものをしないという価値観の人に出あった例である。施しに対する態度は社会階層の受け止め方やメンツにも関わり、注意を要する。

3. 題「プレゼントは冷凍食品」

状況：来日1年目のペルー人の母親は、1才児の男子を保育園へ入所させた。親子とも日本語はわからず、保育者とはお互いに全く言葉が通じあわなかった。入所して1カ月後、「先生、プレゼント」と言って、冷凍食品の海老フライを1袋、担任に渡してきた。母親は加工食品の工場でパート勤務をしているため、その品物を持って来たのである。担任はびっくりした様子で、強く断ってしまった。母親は顔色が変わった。せっかくのプレゼントだったのに、この保母はなぜ強い断り方をしたのか。

考えられる解釈：①保護者からの贈り物は受けてはならない決まりがあるので、強く遠慮した。②この家庭の生活があまり豊かでないことを気づかって、贈り物の心配をしないように言いたかった。③贈り物の仕方が日本と違うため、変なものをくれたと思った。日本の常識として、プレゼントといえば特別な物と思っていた。

この場合の理由：1と3

解説：公立の保育園では、保護者からの贈り物は受け取ってはならない規定がある。限られた語彙ではその説明は難しく、簡単には伝えられなかったため、保護者もそれが理解できていなかった。言葉の障害でコミュニケーションがとれなかった。保母は、保護者側の園に対する感謝は理解できたが、プレゼントを断った園側の気持ちは保護者に伝わらなかった。習慣の違いと園の規則の理解不足が重なって、気持ちのすれ違いが生じた。

コメント…保護者側への出題内容と考えてよいだろう。「気持ちだけ受け取ります」などといった複雑な伝達内容になるとかなり伝え方が難しい。

4. 題「保育料を払いたい」

状況：中国から大学への留学生として夫婦で来日し、子供を保育園に入園させている。留学生には、保育料が無料になるという制度の適用を受けている。本人は「自分は裕福なので、保育料を払いたい」という。しかし福祉事務所では「要らない」と言われた。しかしまだ払うことにこだわっているが、それはなぜだろうか。

解釈：①母国で裕福な生活をしてきたため、日本でも福祉の適用を恥じる気持ちがあり、そのプライドからどうしてもこだわってしまう。②日本の保育料のシステムを理解していないので、自分のお金は受け取れないのかと、感情的な受け止め方をしている。③払っていないと、周囲の人から生活が苦しいと思われるかもしれないので、それがいやだった。④学校で友人から差別されているので、何でも日本人と同じにしなければと思っていた。

この場合の理由： 1

解説：日頃保育園では、親子とも日本語が上手で、何の問題もなかった。3年間は保育料について何のコメントもなく来た。しかし他の人に「ただでいいなあ」などと言われたらしく、それを差別と受けとって、保育料へのこだわりが生じたようであった。

コメント…本人の利益になる社会制度があれば、その恩恵を受けるように勤めてしまいがちである。しかしそれを利用するときの本人の心持ちまでは、なかなか思い至らないという事例である。

5. 題「欠席・遅刻の連絡がない」

状況：園をお休みしたり遅れたりする時は、朝9時までに電話連絡するように指導している。しかしイラン人のAさんからは、休む時いつも昼過ぎに連絡が入る。その児童は宗教的な理由で肉が食べられないので、給食日は特別な配慮がいる。だから園は連絡が遅れると給食の対応に困ってしまう。それなのにどうしてちゃんと連絡をくれないのか。

解釈：①連絡するという意味がわからない。②時間に対する観念がない。③事前に連絡するという習慣がない。④給食はどうにかなると思っている。

この場合の理由： 1

解説：相手側の文化を理解して寛容な対応をするように、園としても心がけている。従っ

て食べられないものをはずすなど、工夫をしている。給食に対応して行くために、連絡がないと困るということを、まず理解してもらうよう努力する必要がある。

コメント…伝達ということの意味が理解されなければ、当然伝達も起きず、対応もできず、せっかくの心がけも生かせない。伝達は全ての基本であるという例題である。

6. 題「どうぞお食べください」

状況：春にパキスタン生まれの3才の女兒が入園してきた。朝10時ごろ登園し、昼は1時頃に母親が迎えにきていた。最初の行事である親子遠足が5月の始めにあったが、あいにく雨が降り、室内で給食になった。その親子はみんなに歓迎されながら、中央に座っていた。弁当を食べ始める時になって、親子がコーラとスナック菓子を持ってきているのを見た他の親は、おやつしか持ってきていないと思った。そこで自分達の弁当をおすそ分けして、「どうぞ食べてください」と親切に差し出した。しかしその親子は途方にくれたようすで、手もつけずに座ったままだった。くれたものを、なぜたべなかったのか。

解釈：①他人からの施しは受けたくなく、自尊心が傷ついたから食べなかった。②みんなに注目され、緊張して食べられなかった。③親子には、この内容で十分お弁当なのであった。食べ慣れない物をもらっても、食文化や食習慣の違いに戸惑い、食べられなかった。④もてなしに対して、お返しができないと思って、遠慮していた。

この場合の理由：3

解説：この親子はイスラム教に基づいた食事文化を持っており、弁当の解釈など生活習慣の違いもある。そのことに気づき、相手の文化を尊重しながら歓迎する態度が必要である。周りの日本人の親子がどう思っておすそ分けしたのかという、外国人向けの出題にする場合は、以下のように選択肢を変えられる。①粗末な弁当しか持って来れないのかと、かわいそうに感じた。②この機会に、日本の食事文化を知って欲しかった。③歓迎の気持ちを、食べ物あげることで心を込めて表現した。外国人と早く友達になろうとしていた。④ちゃんとしたお弁当を忘れたか何かで、お菓子しか持っていないのだと思った。

コメント…日本人側からも、外国人側からも使える例題である。

7. 題「卒園式に来てください」

状況：母親は中国からきた留学生で、日本にきて1年4カ月になる。保育園に子供が入園してから、7カ月がたった。子供はおおむね日本語をマスターしている。母親は最初は片言だったが、だんだん話ができるようになってきた。親側も保育園側も、あまり生活習慣の違いにはこだわらないでやってきた。3月になって卒園式の手紙を渡した。それまで園の手紙は、留学生仲間に読んでもらって理解しているようだった。式の日になって、母親は普段着のセーターにスボン姿で出席した。式後、「みなさん正装だったのですねー」と言った。どうしてこんな服装で来てしまったのだろうか。

解説：①何かあってよばれたことは分かったが、「卒園式」の意味が分かっていなかった。②自国では、卒園式があっても正装で出席する習慣がないので、いつもと同じでいいと思った。③手紙が本人には難しすぎる日本語で、仲間にも読んでもらっていなかったため、この日に式があることがわかっていなかった。④適当な服がなかったので、しかたなく普段着で来た。

この場合の理由：1

解説：日本ではどちらかと言うと卒園式に派手になりすぎるのを押さえる意味で、「平服でくるように」と言う場合が多く、園でもそう言っていた。しかしその本当の意味は理解しにくい。式服でも派手にならない程度という意味だったのだが、この言葉は曖昧でわかりにくかった。本人は卒園式に出て初めて「卒園式」の持つ意味がわかり、そして自国の習慣を思い起こしたようで、「私も民族服を持ってきている」と言っていた。事前にもっと詳しく知らせてあげればよかった。

コメント…本音と建て前という概念も、含まれる例題である。

8. 題「離乳食を勧めていくには」

状況：そろそろ離乳時期にあたる、インド人の子どもが入園してきた。授乳時間のとらえ方もわりと大まかであるうえ、母乳からミルク、それから離乳食へ移行するときは、日本とインドとでようすが違うようだ。例えば、子供はインドではもっぱら母乳で育ったので、ほ乳瓶の乳首を嫌がるし、母親は母乳を与えたいという。どうやって指導していったらいいだろうか。

考えられる方法：①ここではやはりほ乳瓶で我慢してもらうしかない、ということで説得する。②母親に昼休憩に来園するよう依頼する。その時間は、会社の休憩を取ってもらうようにする。③実物の品物を示し、作り方や与え方を実践してやってみせ、納得させてほ乳瓶を使うよう勧めていく。

勧めたい方法：2

解説：時間の観念がおおらかなため、いつごろどうするのか、子供の実態がなかなかつかめないが、風俗、習慣には違いがあるものと考えれば、お互いの歩み寄りが大事である。その後、親も離乳食についての理解を深め、家でも作るような姿勢になった。そして日本は丁寧だといって感激していた。インドではこの家庭はハイクラスに属し、子どもはメイドさんが育ててきたので、自ら関わるのが不慣れであったことも戸惑いの一因のようだった。その後園長がインドの独立記念日の会に招待されたり、総領事夫妻を招いた会に呼ばれたりしているうちに、園でも彼らの食文化についての理解が進んだ。

コメント…離乳の仕方や育児の方針の差異を、相互の歩み寄りで解決している例。

9. 題「初めての運動会に出てこない」

状況：保護者は来日10カ月のペルー人で、片言で日本語を話すことができる。彼らにとっての初めての運動会が、祝日に行われる。それにぜひ参加してくださいと、辞書とゼスチャーで説明したところ、何とか理解してもらったようで、手でOKのサインを出してくれた。安心して当日を迎えたが、彼らは出席しなかった。動物園へ行っていたと言う。どうしてそうしたのだろうか。

解釈：①園には来たのだが、来たら運動会の時間が過ぎていて、終わっていた。②何かがあることは分かったが、出席しなくてもよいと思っていた。③日曜日なので家族で楽しむのが当然と考え、その習慣を優先すべきだと思って行かないことを選択した。④OKサインは、わかったという意味で使ったものではなく、断りの意味であった。

この場合の理由：2

解説：保護者は、運動会という行事の位置づけや、これも日本の文化だということを理解していなかった。保育園側はもう少し、運動会の全員参加の主旨の説明を強くしたほうがよかった。祝祭日の休みの行事であるが、平日と同じ感覚で行われるため、皆が参加することが前提であることなどを、もう少し説明するのがよい。

コメント…非言語的な伝達であるゼスチャーの使い方という意味で、OKサインが受諾の意味なのかどうかというポイントでも展開が可能な話題である。

10. 題「元気なお子さんですね」

状況：外国籍の2才の男児がいる。母親は内職をしており、保育時間は毎日8時30分から5時までである。本児は活発で、自己主張もできる。食欲旺盛であり、保母にとっては扱い易く、保育し易い子である。ある日担任保母が「食欲があり、元気なお子さんですね」と善意に言った。すると母親は、「元気がある」という言葉に引っかかったようであった。それをきっかけに、今までに感じていたものが一気に噴出したようで、いろいろと不満をまくらした。その日の降園後、父親から「そんなにうちの子は手がかかるか」と、抗議の電話があった。お迎えの時子どもが一人遊びをしていたことがあった、なども持ち出して怒る。どうしてほめ言葉なのにこのような対応をするのだろうか。

解釈：①今までに、差別されているという意識を持っていた。そのため保母の元気な子という言葉が、その現れのように聞こえた。②「元気がいい」という言葉に対して、保母が手を焼いていると保護者が感じた。だから園で一人で放っておかれているのだと誤解した。③内職をしているのだから時間に融通がきくはずで、迎えの時間も早くできたのではないか、早くしてくれればいいのに、という思いが園側にもあった。それははっきり言った訳ではない。しかし保護者側も、園側が不満を持っていることを察知して、不快になっていたのではないか。

正解：1、2、3

解説：言葉の障害があつて思うように意志が伝えられず、毎日のコミュニケーションも

不足していた。そのため信頼関係ができていなかった。ささいなことも誤解をよび、機会があると不満が噴出するという結果になった。

コメント…被害的な原因帰属が生じるメカニズムをとらえている例題。

11. 題「一緒に進級できない」

状況：中国の留学生の子どもで、3才になったばかりの女儿が、3才児クラスに途中入所した。新年度を迎えて、クラスの子は4才児クラスに進級した。しかし本児は3才児クラスをもう1年する事になった。親は何故自分の子だけ進級できなかったのか不満に思い、園に抗議してきた。どうしたらよいだろうか。

解釈：①不満があれば抗議するのは当たり前だ。日本の制度が悪いのだから役所に言いに行って、ただしてもらうべきだ。本人が納得のいかないところがあるなら、園としても説明を要求し、味方になるよう努めたほうがよい。②日本の制度がそうなっているのだから、日本にいる以上、ルールに従う方向で考えてもらいたい。園の中で配慮できることがあれば、できるだけのことをする。

勧めたい方法：2

解説：制度的なものは、すぐには改善できないので、よく制度の説明をして理解していただくのが基本であろう。

コメント…制度への不満にどう対応するかという例題。気持ちは受けとめたうえで、十分な説明をして、納得をどう引き出すかがポイント。

12. 題「入園時の対応をどうしたらよいだろうか」

状況：中国人のお父さんとお母さんが、11カ月の赤ちゃんを保育園に連れてきた。園長はお母さんのAさんに、入園したてなのだから、1週間は子どもを慣れさせるために、早めに迎えに来るようにと話した。Aさんは理解できたようにうなずいたが、最初の日から昼になっても迎えに来なかった。電話をすると園には来たが、まだ仕事があると言って子どもをおいたまま帰ってしまった。どうしたらよかったか。

解釈：①Aさんは、うなずいてはいても話が理解できていなかった。Aさんはもっと理解できるまで聞くべきだ。②保育園は、入園についての説明をもっと具体的にしなければいけない。③言葉のハンディをあらかじめ予想して、仲介の人を入れて話を進めておけばよかった。

勧めたい方法：3

解説：相手がうなずいたり、わかったふうにも反応しても、それは本当に理解できたとは限らない。保育園側としては、相手が分かっているものとして考えてしまい易い。特に言葉の障害は、考慮しておかなければならないことである。大切なことは確実に伝わる工夫をした方がよい。

コメント…外国語を用いた会話では、分かったような返事をしたり、分かったような態度をとってしまう。この点は、誤解を生じるので互いに注意しなければならない。

13. 題「登園時間が早い」

状況：Jちゃんは、中国の残留婦人の祖母を持ち、父、母（中国人）と一緒に帰国して、1年6カ月が経った子である。これまで送り迎えをしていた母が、手術のため入院することになったので、祖母が代わることになった。そしてこれまでは午前7時30分に登園していたのが、祖母の勤務の都合で、7時20分位に登園すると園へ伝えてきた。そこで園長は、「保育時間は7時30分からなので、何か方法を考えて下さい」と答えた。それを聞いた母親は、困って泣いた。父親は早朝勤務なので、定時の送り迎えは無理だという。どうしてあげたらよいか。

解釈：①他の入園者もみんな7時30分の登園を都合をつけて守っているのだから、同じようにしてほしいと繰り返し伝える。②長い時間ではないのだから、保母が少し早く来て、受け入れてあげればよい。③「福祉事務所とか民生、児童委員に相談してみたらいかがですか」と話をする。④知人や近所の人への援助を受けたらよいか、と勧める。

勧めたい方法：3

解説：Jさんの家庭状況や地域の状況を十分に把握し、園より福祉事務所へ働きかけて相談に乗ってもらい、保育援助できる人を探してもらうのがよい。保育サービスの視点から考えてみる必要がある。

コメント…社会的な制度を活用するアドバイスをするという意味で、ケースワーク的な関わりをとる例。

14. 題「子どもが怪我をした」

状況：中国人は一人っ子政策の国だけあって、子どもをとっても大切にしようだ。その姿が、時には保育者からみても過保護に感じられることがある。文化の違いもあってだろうが厚着であったり、小さいこともすぐ心配したりする。子どもが小さい怪我をしたところ、それに対してもおおげさに訴えてきた。どうしたらいいか。

解釈：①日本人との意識の違いがあるだけだ。これくらいならと思って、消毒しただけで気につけないほうがよい。過保護は子どもをだめにするのだから、厳しくすべきだ。②保育者側は、小さいできごととしてとらえていたため、怪我に関する情報を伝えずに帰らせてしまった。しかしこの様子も含めて、日々の園での様子を細かく伝えていくようにするほうがよい。

勧めたい方法：2

解説：中国という国の政策、文化の違いを理解し、宝物のように大切に育てておられる子どもさんのことを思えば、暖かく見守り、受け入れることが必要であろう。親が納得で

きるようにゆったりと接し、言葉が通じないところは絵にかいたり、身ぶり手振りでしっかり伝えていくようにするとよい。

コメント…方針の違いがあったときは、単に信念を貫けただけではなく、十分な説明をしたうえで行動するというアドバイスである。

15. 題「長いスカートをはいてくる」

状況：Mちゃんは年少児である。韓国人の家庭で育ち、養育は祖母が主となっており、送り迎えも祖母がしている。Mちゃんは、たびたび長いスカートをはいて登園してくる。しかし戸外遊びなどの際、それでは安全面に問題がある。そのことを祖母に話すのだが、また翌日も長いものをはいてくる。祖母は迎えに来たとき、友達がMちゃんに長いスカートのことを責めているのを見て怒った。どう対応していくのがよいだろうか。

解釈：①長いスカートが正装だと思っているので、祖母はいけないと言われたことが納得できなかった。誤解をといたほうがよい。②Mちゃんの服を着せているのは母親で、祖母と両親との意志の疎通がスムーズに行っていなかった。家庭内のことなのでしかたない。③安全面は大事なことなので、祖母まかせにせず、安全のためやめて欲しいということを、両親にも理解してもらうように働きかけたほうがよい。

正解：3

解説：遊びの機能と安全面について、祖母にも親にももっと具体的に話しをして、よく理解してもらうべきだった。遊びが重要であること、そのためには安全でいてほしいことは、きちんと言えば納得してもらえらるだろう。

コメント…送り迎え時の軽い注意だけではなく、大切なことであればさらに家庭との連絡をこころがけることも必要という例。

16. 題「贈り物をくれる」

状況：4月入園のある3才児は、父親は日本人で母親はフィリピン人である。この母子は、12月のクリスマス近くになって、リボンをかけたプレゼントを担任に渡そうとした。公立園は、保護者からの贈り物を受け取らない規定があることを担任が話した。しかしそれが理解されなくて、無理に置いて帰ってしまった。どうしたらよいか。

解釈：①公立の園なので、困るからと言ってそのまま返しに行く。②気持ちだから今回は受け取るが、今後は受け取らないことを話す。③受け取って、代わりの品物を返してお礼にする。④気持ちだけ受け取ると言って、現品は返す。

勧めたい方法：4

解説：フィリピンのクリスマス行事は、どのようなのかよく話を聞き、行事に対する理解を示しておくことも大切である。大事な人に贈り物をする習慣があるというなら、その対象になっているのは嬉しいと伝える。その上で、「保育園は育ちゆく子どもさんをお預

かりする施設ですから、金品はお受けしないことになっています。申し訳ございませんが、お返しさせてください。お気持ちはとても嬉しくいただきました」と説明する。夜になって、父親にも電話をして、その旨をよく話して理解してもらう。家庭の和を壊さないような配慮も必要だろう。

コメント…気持ちの表し方が異なっている例。感謝や親しみを表現するときの習慣の違いがあったとき、どうやって気持ちを察知し、また気持ちの部分だけを受け取るかは重要な問題であろう。

17. 題「贈り物と預かり物の違い」

状況：ブラジル人のAさんの入所後、園での生活用品（布団、衣類、帽子）などを用意し、プレゼントしてあげたところ、喜んで使っていた。その後、保育園で生活しているときに、衣類などを貸してあげることがあったが、それを全部プレゼントと解釈されてしまった。他のブラジル人の隣人Bさんに、娘の赤い上靴を届けてもらうように預けたところ、それもプレゼントしてもらったと思ってしまい、男児がそれをはいて喜んでいて、それをみたBさんが怒り、大げんかになった。どうしたらよいか。

解釈：①生活に慣れてきたから、日本語が通じると思ってあずけたのにと、抗議する。②Aさんは渡されたから、プレゼントされたと思ってしまったのであって、無理はないので許すべき。③Aさんは、物を渡されても、プレゼントかどうか確認すべきだった。Bさんに謝らせた方がよい。④物を渡すときに、Aさんに理解できるようによく話して、理解できたか確認して渡せばよかった。

勧めたい方法：4

解説：このことがあってから、プレゼントと貸した物と預かり物との区別ができるように、Aさんによく話すように努めた。Aさんもこの違いに気づいて、区別するための注意を払うことを覚えてくれ、トラブルが少なくなった。

コメント…言葉の問題は、園と保護者の間だけではなく、保護者間の問題にもなっている。仲裁の仕方を考えねばならないこともあるという例。

18. 題「衣類の貸し出し」

状況：3才と1才の、ブラジル籍の両親の子どもがいる。個人の衣類が不足したので、園用の肌着（パンツ・シャツ）、ズボン等を貸して着せて帰した。しかし翌日、平気で貸した服を着て登園してきた。個人用の衣類を補充してくれるよう知らせ、保育園用は洗って返してほしい旨も伝えたが、ほとんど返ってこない。自分の物のように引き続き使用する。どうしてだろうか。

解釈：①ブラジルでは、衣類などは支給制度のようなものがあるので、借りた意識がない。②この両親は経済に不自由しているため、後で返せばいいやと思って、つい使っ

まう。③育児姿勢が保育園まかせで、一見ルーズに見えるが、このおおらかさも国民性からくるものだろう。借りたからすぐ返さねばなどと、気にしていない。

この場合の理由：3

解説：借りた衣服は、個人的には返すことが原則になっている。それを理解してもらい、衣類を借りた時には洗って、それが乾いてからできるだけ早く持ってきてもらうよう、繰り返し繰り返し話すようにする。物価の高い日本で生活するのは経済的にも苦労はあると思うが、家族4人で父親の留学を支えている心情もくんで、あまり厳しく取り立てるような言い方は避けたい。

コメント…例題17と類似の素材である。片方は気にしていても、他方は気にしていないというのは、よくある構図といえる。いらだちを押さえてよく説明する姿勢が必要である。

19. 題「衣服の調節をしてほしい」

状況：インドネシアの留学生の子どもで、2才になる子がいる。初めての冬を迎えたが、肌寒くなると厚着をしてくるかと思えば、急に薄着になり、子どもは鼻水を出したりする。夕方などは気温が下がるので、園でも気を使う。もっと衣服の調節をして欲しいのだが、どうしてしないのだろう。

解釈：①朝晩の温度差など、日本の気候を理解していない。朝、親が寒ければたくさん着せるだけで、戸外で遊ぶ子どものことは理解していない。②着るものに対して、もともとあまり気にしない。朝は忙しいから、単に無頓着にそのへんのものを着せている。③夏でもセーターを着たりする。人からみてどうかは関係なく、人に合わせる感じではない。自分のファッションを貫きたいのではないか。④母国では日本のような季節はないので、シーズンに応じた調整には慣れていない。

この場合の理由：4

解説：母国ではもっと暑かったため、日本に来てたいへん寒いと感じ、そのため子どもにたくさん着せていたようだ。季節による衣装箱の入れ替えという考え方もないため、常に全ての衣類を近くに置いておき、あるものを重ねて着るようだ。だからセーターや半袖を一緒に着たりする。他の習慣については日本にあわせようとしているところがあり、トラブルはないのだが、感覚的な部分ではなかなか風土になじまないのかもしれない。

コメント…気候風土に合わせる方法は、そこで成長した者なら会得している。渡日者も試行錯誤すれば学べるであろうが、まわりを見習ってくれば早いのにと案じている例。

20. 題「園で怪我をした時の処置は」

状況：3才のA子ちゃんは、日系ブラジル人の子どもである。両親とも日本語は片言程度しか話せない。ある時園庭で転んで膝に擦り傷を負ったので、担任が消毒をしてサビオをはってあげた。その後サビオをはずさないままにしていたため、数日後その周囲がただ

れてしまった。母親がかんかんになって怒ってきた。どうしてこうなったのか。

解説：①担任は、必要がなくなれば親の方がサビオをはずすものと思ったが、親は園が手当を続けると思っていた。②親は手当をしてもらったので治ると思っていたのに、その手当のためひどくなったのは、やり方を間違えたためと思い、怒った。③親はサビオが何かも、その使い方も知らなかった。

この場合の理由：1、2、3

解説：担任は、その後の怪我の様子をサビオをとって見てあげるとよかった。日本人は、サビオは一般的に使用しているが、ブラジルの人にはその習慣がない。親は使い方が分からなかった。その中で担任の配慮も不足していた。言葉が通じあわないため、怪我の様子や手当の仕方など、説明が十分できない。しかし誠意を持って片言であってもしっかり母親に説明しておけばよかった。親が怒るのは当然かもしれないが、子どもの怪我の様子を、母親ももう少し気をつけておいてほしかった。そういった希望も伝えておくべきであろう。

コメント…日本で当たり前と思っても、医薬品が違う場合は、手当が理解できないこともある。

21. 題「おさがりの服や靴の贈り物」

状況：A子ちゃんは3才になる保育園児である。1年半前に日本にいる祖父母のもとへ、親子3人で中国から帰国した。現在一家は祖父母の近くに住んではいるが、別世帯で暮らしている。ある日、園のさる保護者が、衣類の中古を「上のお姉ちゃんのお下がりだけど、A子ちゃんにあげてください」と持ってきた。担任が受け取りA子ちゃんの母親に渡したところ、「ありがと」と言って受け取った。その後A子ちゃんは、2～3回それを着て来た。

1年後、再び同じ保護者より同じ様な物をあげてくださいと持ってきた。しかし今回担任は、どうしたものかと態度を保留中である。なぜ担任は迷っているのだろうか。

解説：①日本語がほとんど通じない保護者だったので、「ありがと」と受け取っていったが、本当に喜んでもらったかどうかには確信がない。相手の本当の気持ちは把握できていないから心配になった。②もらったものを着ているのだから、今回もあげたらよいと思う。しかし一度ならともかく何度もでは、やはりおせっかいではないかと気にした。③前回より経済的に安定しているようなので、相手のプライドを考え、無理に押しつけない方がよいのではないかと思った。④言葉はよく通じにくいだが、今は保母との意志疎通ができていいる。前は本当はどう思ったか、今回はどう思うかをまず尋ね、しっかりと思いを伝えあう機会を作ってからにしようと思った。

この場合の理由：4

解説：前回から1年たっており、日本の習慣などは、少しずつわかりかけている。今ならば園とも筆談などである程度会談できるであろう。日本の習慣や価値観、中国の習慣を、互いに知り合うよい機会にして、対応を考えたらよい。

コメント…時間がたてば、理解も語学力も進む。前とは違った対応も考えられる。

22. 題「自分では手を動かそうとしない」

状況：A君は両親の仕事の関係で日本にきた外国籍の子どもだ。今は3才児のクラスで、毎日楽しく過ごしている。クラスでは、身のまわりのことを少しずつ自分でできるようにという方針で、食事、排泄、睡眠なども、援助してやりながら自分するよう働きかけている。しかしA君は、食事の時も午睡時も、全く自分では手を動かそうとしない。ただじっと座っていたり、立ったままでいたりする毎日だ。どうしてこうなのか。

解釈：①家では両親が過保護なため、全てやってしまう。急に言われてもできないのは当たり前だ。②国では使用人まかせの生活習慣があったので、自分でするものとは思っていない。そのような習慣の差が出ている。③本人に全くする気がないのでしないだけ。無気力な子どもである。④子どもの気まぐれはよくあること。いずれはできることだから、今無理にさせる必要はない。

この場合の理由：2

解説：担任が両親に確かめてみたところ、A君の国では、幼児期、身の周りのことはすべてメイドさんがすることになっているとのことであった。

コメント…子どもには、感覚的な習慣の違いを察知する力はなかなかない。思い込みで自分の習慣通りに振る舞っていることもあるので、安易な誤解をしないように注意する。

23. 題「特定の子どもとの接触を好まない親」

状況：その中国人の5才男児は、一人っ子である。クラスでの集団遊びにはなかなか入りきれないようすが、ある男児は優しい性格のため、けっこう受け入れてあげている。しかしその子との間にも、トラブルは生じることがある。トラブルの後には話し合いをするのだが、その中国人の親は「わからない」と言いがちである。そのうちその親は、その特定の男児との接触を好まないようになった。そして子どもが喧嘩した時には、「差別している」と園に対して怒ってきた。どうしてこう短絡するのか。

解釈：①日本語が理解できないので、疑心暗鬼になっている。②子育てについての考え方が違う。喧嘩など危ないからとんでもないと思っている。③1人だけの子どもだから、期待を込めて相当大事にしている。

正解：1、2、3

解説：この後園では、中国語が少し分かる人を紹介してもらい、その人が間に立って対話を心がけ、相互理解を深めようとした。また園の者も親から中国語を教えてもらい、それが少しでも相互理解の助けになるように努力した。保育参観をしてもらって、日常生活をみてもらい、保育園の生活を理解してもらえるようにした。

コメント…相互理解のための具体的な方法を、幾重にも実践している。

24. 題「お弁当を買ってきました」

状況：ブラジルのBさんの子どもは、日本にきて1年の3才児である。Bさんには日本語はまだ通じない。遠足の行事の時、「お弁当や敷物等を持ってきてください」と話しても、どうも分かってもらえない。絵に描いて説明したが、それも分からないようす。どんなにくわしく説明してもわからないようで、困った保母はBさんの会社の人や、Bさんと親しいブラジル人で日本語が多少分かる人に来てもらい、通訳を頼んだ。遠足当日、Bさんは既成の弁当を買って持ってきた。手作りの弁当を持ってきてくださいと伝えたはずなのに。どうしたらよかったのか。

勧めたい方法：①あきらめて持ってきた弁当を食べるしかない。買った物の方が好きなのだろうから、放っておく。②何を持ってくるかだけではなく、そうする意義も含めてもっと分かるまで説明し、やはり手作りのお弁当にしてもらえばよかった。手作りの必要性を理解していなかったと思われる。③保母が一つ作って持っていく。それなら面倒もおこらなかつた。④ブラジルのご飯は、焼き飯風のぱらぱらしたごはんのようで、お弁当には不向きにみえる。しかしそれでもいいから持ってきて食べてくれと伝えればよかった。

勧めたい方法：2、4

解説：ブラジルには遠足の習慣がないので、こういう方法でやれと無理に言うと、押しつけた感じがするかもしれないと懸念される。しかし園行事として考えると、母親の手作りの弁当を持ってきて、みんなといっしょにあたたかい雰囲気味わってほしかった。このとき親は保母の絵を見て、なるべくその通りのものを買ってきたようだった。自分では同じ物は作れないと思ったので、買ったのである。手作りであればいいのだから、自分でできる範囲のものを持ってきてくれればよい、と伝えればよかった。弁当の内容については、異文化を理解して、保母が柔軟な態度をとったらよいと思われる。

コメント…意志の伝達の困難とルールの柔軟な解釈という、二つの課題が含まれている。

25. 題「午睡時間にとった行動」

状況：ブラジル人の5才児がいる。この子は午睡時になると、まわりが騒がしいと言って外に出ていく。理由を聞くと、「騒がしいから。静かになったら入るよ」という。どうしたらよいか。

解釈：①部屋にいる子どもたちに、ただちに静かにするように注意する。②静かになるまで、目の届く範囲内でこの子の行動を認めておいてやる。③園の決まりなのだから、音に関わらず部屋に入るように諭す。④うるさくなっていたのが問題なのだから保育者が反省し、その時になったら静かにできるような環境づくりを工夫する。

勧めたい方法：4

解説：子どもたちが騒がしくしているのは、自分の保育の仕方に工夫の余地があるためであり、その見直しが必要と反省すべきである。静かなところで寝たいという本人の気持ち

ちを尊重し、クラス全員で静かに眠れるような配慮をするのがよい。

コメント…外国籍児童でなくても、どの児童が言っても、保育の心がけとして同じ対応が勧められる事例であろう。

26. 題「プール遊びの準備」

状況：フィリピン人の母親を持つ2才児がいる。プール遊びをするので、必要な持ち物について、手紙を渡し、口頭でも説明した。母親はうんうんとうなずいて、質問もなく帰った。保母は、理解してもらったと安心した。しかし次の日、何の準備もなく登園してきた。母親に本当に分かっていたのか確かめたところ、全く理解してもらっていなかったことがわかった。今後どうしたらよいだろうか。

解釈：①今回は二重に伝えても何も伝わっていなかった。さらに分かりやすく工夫して説明し、確実に持ってきてもらう。②全ての持ち物がそろふことを要求しないで、どうしても必要な物を持ってきてもらえばよいことにする。③分かってもらふことを要求するから手間もかかり、大変になる。全て保育園のものを貸すことにすれば行き違いもなくよい。④こんなことが度重なってはいけない。日本のやり方に慣れてもらうべきだ。集団生活をするのだからもっと強く言い、強制的に持ってくるよう要求する。

勧めたい方法：1

解説：実物を見せたり、ジェスチャーで示したりして、具体的に必要な物のイメージを持ってもらう。プールの現場につれていったりして、プール遊びの内容を伝え、その物がなぜ必要かについても理解してもらう。そして確認を取りながら、わかるまで繰り返す。清潔感の違いもあるように思われるが、それも理解しながら、長い目でコミュニケーションを取る気持ちでいるとよい。最初はプール遊びにどうしても欠かせないものだけを求めるようにすることも、時には必要かもしれない。厳しい要求だけでことをすませようとするのでは、保母の理解と努力が足りない。強制的にやると相手の誤解を招き易く、その後のコミュニケーションも取りにくくなる。ゆっくり時間をかけ、信頼関係を作るよう努力することを基本と考えたい。

コメント…プールに入ることに限らず、相手にとって不慣れな習慣であれば、日本人が当たり前と思うことでも説明がいる。

27. 題「友達にかみつかれた」

状況：1才児20名のクラスで、子どもたちはぬいぐるみで遊んでいた。A子が持っているぬいぐるみが欲しかったB子は、それを取ろうとした。A子は取られまいとして、B子の腕にかみついた。B子の保護者は外国人である。迎えの時、そのB子の保護者に状況を話したが理解してもらえず、腹をたてて帰ってしまった。その後もB子の保護者と保母との信頼関係が、うまくいかない。どうしたよらいか。

解説：①子ども同士のことなので、親が怒るのはおかしい。B子の親が非常識なのだから、放っておく。②言葉が通じなかったため、状況を十分理解してもらえなかったのだろう。B子も悪いと分かれば、一方的に怒らないであろうから、もっと説明すればよい。③その後、日々子どもの状況を話していくことで、信頼を取り戻していけばよい。けして保母がB子をないがしろにしていない、とわかってもらうことが大切。

勧めたい方法：3

解説：よくみてもこういう状況はある。年齢が低いので、子供の言葉が少ないため、子どもから報告を聞くことは難しい。保母がよく様子を話すことが大事である。

コメント…保護者との連絡を密にすることは、外国人に限らず、普段の心がけであろうが、それをより緊密にしたらいいという提言である。

28. 題「発熱児の迎えを依頼する」

状況：ある園児の保護者Aさんは、当市在住3年目の外国人で、単語とゼスチャーで会話が通じる。英語は得意で、パート仲間に教えたりしており、日本人との英会話にも積極的である。園で子どもが発熱したとき、早急に連絡が取れないことがあった。やっとのことで知らせても、重要視してくれず、園のほうから連れて来てもらうのが当たり前と思っている。日本の人との会話を楽しむのはけっこうだが、保護者として無責任ではないか。どうしたらよいか。

解説：①自分にとって都合のいいやり方を取る人なのだから、厳しく抗議する。②せっかく日本で自分を高めようとしているのだから、それを認めてもう少し迎えを待ってあげる。③保育園は安心して預けられると思って、信頼しているのだからそれに応えてつれていってあげる。④来てもらいたい旨をよく説明し、できるだけ都合をつけてもらうようにする。

勧めたい方法：4

解説：自分が忙しい時は預けたままでよいと思っているが、それが誤解であることをわかるように説明する必要がある。

コメント…本来理解不足や誤解であっても、本人の否定的な人格へ原因帰属が向いてしまう可能性がある。

【参加者の感想】

第1～第3回のプログラムにおいて、最後に参加者の感想を記述式で尋ねた。おおむね異文化接触を概念化できたことを評価し、態度として重要な要素は何かがわかり、心構えができたと述べている。文化による物の見方の規定が存在すること、自分自身にもそれがあること、相互理解と相互尊重が出発点になることなどは理解された。職場でも学習やケース検討の場を作りたい、外国語学習を始めたい、身近な問題から出発したいなどの意欲も

見られた。具体的な問題の解説と、その解決方法へのニーズも高い。今回は基本的内容だが、次の段階として、文化的同化、個人差、人間としての同質性の範囲などの問題に言及したものもあった。

【参加者の認知的変化】

第2回目のプログラムにおいては、①研修前の質問紙、および②研修後の感想記述用紙に、外国人のイメージを3つ記入する欄をもうけた。①の結果は先に述べたが、ここでは②の結果をまとめ、①②の間の差について検討する。

研修後の外国人のイメージを、研修前と同じ分類で集計した（表6）。回答者数および複数回答の回答数が異なるため、統計的な検定は困難であるが、回答の比率の目安を求めてみた。回答がかなり増加したと思われるものは、「外見的特徴」、「人間としての等質性」であった。やや増えたと思われるものは、「内面的・行動的特徴」、「社会・文化的な差」であった。僅かに増加したようにみえるものは、「相互理解の困難」である。逆に減少の傾向を示したのは、「社会での位置づけ」、「自分の気持ち」であった。

こうしたことから、プログラムの後では社会的な一般論で「外国人」を捉えなくなり、また近づきがたく警戒すべき者という印象も減少したといえよう。そして差異を多岐に渡って明確に意識しながらも、人間としての同質性により注目するようになったと考えられる。

今回のプログラムは、異質性の存在を認識することと、異質性との接触の際に生じる現象を理解すること、そしてそれを乗り越えるための意識の持ち方に焦点化されている。上記のプレーポストの変化から、効果の一端が確認できよう。

IV. 結び

以上ショート・プログラムの実践報告として、その概略と成果を紹介した。異文化間教育には、まだ定型はない。今回はコミュニケーション学で多用されるシミュレーションやアシミレーターを用いたが、さらに多様な方法が考えられよう。

シミュレーションは、導入手段として効果的と思われる。今回用いたバーンガは、多人数であっても小グループに分けて実施でき、時間もかからず手軽な方法として勧められる。ただし指示を徹底できるような、集団の統制が必要になる。アシミレーターは、それを素材としてディスカッションを成立させる場が作れるかどうか、成否が左右されるように思われる。

今回は比較的多人数であったため、上記のような集団でできる形式の内容を優先した。しかし対象が少人数であれば、グループワーク的なエクササイズや、体験談の発表が活用できよう。特に臨床心理学で用いられるような、自己の客観視や、他者との関わりの質を扱ったものは、「異文化」を対人関係の中で具体的に消化させていくためには、きわめて

表6 研修後の外国人のイメージ

数字は回答数（1人平均2.87個）。カッコ内は回答者数75で割って100をかけた数字。

1. 外見的特徴 19(25.3)
外見的な差 19
2. 内面的・行動的特徴 54(72.0)
主張の明確さ 16 自由な考え方 1 太らか 7 積極性 7 合理的 3
ユーモア 4 あっさり 1 派手 1 行動的 1 開放的 1 礼儀正しい 1
一生懸命 1 能力高い 1 向学心・勉強熱心 3 話し好き 1 国に誇り 1
異文化に興味あり 1 時間感覚が違う 2 オーバーな表現 1 優しさを喜ぶ 1
3. 社会・文化的な差 59(78.7)
生活習慣の違い 13 文化の差 36 食文化の差 2 価値観の差 1 貧富の差 5
生活環境に差 1 宗教による生活の差 1
4. 社会での位置づけ 7(9.3)
外国人労働者・出稼ぎ 2 タレント・有名人 1 国際交流 1 ホームステイ 1
留学生 1 社会的意味 1
5. 自分の気持ち 20(26.7)
不安感 3 親しみ 1 友達になりたい・交流したい・援助してあげたい 10
好奇心 5 威圧感 1
6. 相互理解の困難 49(65.3)
言葉の違い・障害 34 近づきにくい 9 馴染みにくい 1 誤解が生じ易い 1
時間がかかる・通じあうまで大変・意志が通じにくい 3
考えていることがわからない 1
7. 人間として等質 12(16.0)
同じ人間 7 通じあえる 3 外国人扱いは間違い 1
いろいろな人がいて当然 1

有効な展開点になるものと思われる。また個人の体験を直接共有するようなグループワークや、ピアグループ的な試みも、現時点の問題を乗り越えるためのサポート機能を発揮する副次的効果をもたらすものと思われる。また単発のプログラムとしてのみならず、連続セッションが企画できれば、ソーシャル・スキル訓練など、より高度な内容を含めることができよう。例えば「アメリカ留学ソーシャル・スキル：通じる前向き会話術」(アルク)などは、その適用例と考えられる。状況にあわせて、今後のプログラムの展開が測られるべきであろう。